

令和 元年 6 月 18 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02686

研究課題名(和文) 中国黒龍江省における危機に瀕するダグル語の社会言語学的研究

研究課題名(英文) Sociolinguistic studies on the endangered Dagur language in Heilongjiang Province, China

研究代表者

包 聯群 (BAO, LIANQUN)

大分大学・経済学部・教授

研究者番号：40455861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中国黒龍江省チチハル市梅リスにおけるダグル語の語彙的、文法的特徴を明らかにした。

またダグル語は中国語と接触を起こし、言語変異が発生している実態を解明できた。異なる年齢層のダグル人の言語使用と言語意識の現状を明らかにした。ダグル人はダグル語とダグル文化の維持と継承に積極的に取り組んでいることがわかった。当研究は言語接触に関する理論的枠組の構築に中国での言語接触事例を提供できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国黒龍江省チチハル市梅リスにおけるダグル語について、今まで社会言語学の視点からの調査研究はあまり行われていなかった。危機に瀕するダグル語について異なる視点からの調査を行い、今まで明らかにされていなかった言語接触、言語変異のプロセス及びその実態を解明し、中国での言語接触事例を提供することによって、言語接触の理論的枠組の構築に貢献することが重要な意義を持つ。また、少数言語の保護と継承にも繋がると考えられる。

研究成果の概要(英文)： This Project clarifies the vocabulary and grammatical features of the Meilis Dagur language in Qiqihar City, Heilongjiang Province, China.

It also studies the phenomenon of language variation in the Dagur language after its contact with Chinese. It investigates about the language use and language attitudes of Dagurs of different ages. It is known that the Dagurs are actively working to maintain the Dagur language and the Daur culture. This study can provide a case for constructing a theoretical framework for language contact in the Chinese context.

研究分野：社会言語学

キーワード：ダグル語 危機言語 言語接触 言語変異 言語シフト コードスイッチング 混合言語 言語継承

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

世界各地で多くの先住民言語が消滅の危機に瀕している。危機言語に関する研究、記録・保存が各国で進められているとはいえ、研究者のレベルや研究分野に問題があり、十分とはいえない状態にある。2010年の中国人口センサスによると、ダグルの総人口は13万2千人にのぼるが、すべての人がダグル語を話せるとは限らない。中国では、ダグル語について様々な調査が行われてきたが、言語接触と言語変異の視点による研究分析が十分に行われたとは言えない。また、日本においてもこうした研究は欠けていた。ダグル語に関する先行研究として、中国では、仲素純の『達斡爾語簡誌』（1982）、恩和巴図の『ダグル語と中国語の簡略辞書』（1983）、『ダグル語語彙辞書』（1984）、『ダグル語とモンゴル語』（1988）などがある。また丁石慶の「ダグル語における満洲語借用語について」（1990）、「カザフ語が新疆ダグル語の音韻に与えた影響」（1991）、「ダグル語における早期中国語借用語について再検討」（1993a）、「ダグル語の方言研究問題についての総合的な分析」（1993b）、「新疆ダグル語簡論」（1995a）、「新疆ダグル語の音韻及びその特徴」（1995b）、「モリダワ（莫力達瓦）における「ダグル族」のバイリンガル現象について」（1995c）、『ダグルの言語と社会文化』（1998）、『バイリンガルエスニックグループの言語文化的適応と再構築』（2006）といった一連の研究があげられるが、内蒙古自治区ダグル学会が編集した『ダグル族研究』（2008）、ガンソへ（剛蘇和）の『ダグル語の分類語彙集』（2011）などの総合的研究も現われていた。日本国内では、栗林の「ダグル語」（1988）、『『達斡爾語詞彙』蒙古文索引 附：満洲文語索引』（2011）、バダガロフ J.B の「ダグル語とブリヤート語の接触に関する研究—音声学、形態論の資料を基にして」（2013）、風間・山田の「ダグル語」（2014）、呉人徳司の「ダグル民族における満洲の影響及び言語使用の実態」（2015）などがあり、その他に高春梅の「中国北方少数民族ダグル人の民族教育と文化継承の実態—黒龍江省チチハル市を中心に—」（2012、包聯群訳、『TOAFAEC 東アジア社会教育研究』）、高春梅・呉少紅・包聯群の「中国の〔広場ダンス〕の誕生とその発展状況—黒龍江省チチハル市の漢・ダグル・モンゴル民族を事例として—」（2015）などがある。また、私自身も3回にわたる現地調査を経て、まず「中国黒龍江省チチハル市におけるダグル語の実態」（『大分大学経済論集』2015）という研究報告をし、その中でダグル語と中国語の接触について部分的に解明し、副詞、文法要素などの借用だけではなく、コード切り替えと混合現象、さらには中国語の借用による「過剰一般化（over-generalization）」の現象もあり、引き続き研究する必要があることがわかった。

中国のダグル人は主に内モンゴル自治区、黒龍江省および新疆ウイグル自治区に居住している。黒龍江省ではチチハル（齊齊哈爾）市の梅里斯区などにダグル人が集中している。具体的に言えば、梅里斯区には13,356人のダグル人が居住しているが、チチハル市の総人口の8.65%しか占めていない。若い世代では流暢な話者が少なく、伝統的な物語を語れるのが80歳以上の人に限られている。中国の少数民族の多くが文字を持たないが、ダグルも同様である。文字を持たないため、もしダグル語を話せる人がいなくなれば、ダグル語は完全に消滅してしまう恐れがある。こうして東北地域チチハルのダグル人の言語、文化や伝統的な習慣などが危機にさらされている状態にある。ダグル人は長期にわたり漢字か満洲文字、あるいはモンゴル文字を使用してきた。とくに清朝のとき、満洲語に精通する人も多く、また、地域によって、ダグル語以外の特定の言語を得意とする人が大勢いた。例えば、新疆ウイグル自治区塔城のダグル人はハサク語、内モンゴルのモリダワダグル自治旗のダグル人はモンゴル語などを話せる。ダグル語は今四つの方言に分けられており、一つは内モンゴルのブタハ（布特哈）方言である。当方言の使用人口は最も多く、広範囲にわたって分布している。一つはハイラル（海拉爾）方言を話す人であり、凡そ5千人前後であると言われている。もう一つは新疆方言を話すダグル人

は新疆ウイグル自治区の塔城に居住している。黒龍江省のチチハル方言を話すダグル人は主にチチハル市梅里斯「ダグル族区」、チチハル市郊外及び富裕県の「大登科」と「小登科」村などに集中的に居住している。言語学者の多くは、ダグル語をアルタイ系言語のモンゴル系諸語の一つであると見ている。恩和巴図（1988：485-486）、包聯群（2011：309）によると、1955年に行われた2,566の語彙に対する調査では、モンゴル語と同起源の語彙が69.3%以上もあるという。また、中国語起源の語彙も5.4%を占め、満洲語起源の語彙は10%を占めている。近年、とくに中国の改革開放、都市化政策などの影響により、ダグル人の言語と文化に大きな変化があり、伝統的な文化習慣を失い、消滅の危機にさらされている状況にある。筆者の調査に基づくと、チチハル・ダグル人の若者の多くは自分の民族語を話すことができなくなり、40代以上の人しか自分の母語を話せないが、70代～80代の母語話者も中国語語彙を多数取り入れており、ダグル語の使用環境が失われつつあると言える。従って、ダグル人の言語実態を正確に記録し、それらを残すことが至急求められている。本人は今までの現場調査の経験を活かし、危機に瀕するダグル語の正確な記述・分析をすることによって、アジアでの消滅に瀕する言語のデータを提供し、接触言語に関する理論枠組の構築に貢献したい。

2. 研究の目的

本研究は、中国黒龍江省チチハル市におけるダグル語（達斡爾）の現地調査を実施し、その実態を明らかにすることを目的とする。具体的には、

- (1)社会言語学の視点から危機に瀕するダグル語の調査を行い、今までの研究で不十分である言語接触、言語変異の視点を取り入れる。
- (2)ダグル人の異なる年齢層の言語使用の実態を解明する。
- (3)ダグル語の物語を記述分析し、言語接触の実態を解明する。
- (4)Bakker and Muysken(1994)、Bakker and Mous(1994)などが提唱する混合言語（Mixed Language）の理論がダグル語に適応できるかどうかを検証する。
- (5)中国語や満洲語と接触したダグル語の研究を進め、言語接触・言語変異に関する事例を提供し、理論的枠組の構築に役に立たせる。

3. 研究の方法

本課題は、先行研究を参考にしながら資料の分析を行った。また、現地に出向かい、インフォーマントに関して聞き取り調査を実施し、語彙や文法事項、物語の録音・録画を取り、それを分析し記述した。さらに異なる年齢層のダグル人に対して、アンケートやインタビューの調査票を作成し、言語使用と言語意識に関する調査を実施し、分析を行った。物語をローマ字に転写する作業を継続し、言語実態の分析をさらに進めていく予定である。

また、周辺メタコミュニケーション情報を収集し、言語保護と言語継承に繋げるようつとめた。研究成果報告会を開催し、同分野の研究者と意見交換を行った。

4. 研究成果

本研究は、主に以下のような成果を得た。

- (1) 中国黒龍江省チチハル市梅里斯におけるダグル語の語彙的、文法的特徴を明らかにすることができた。
- (2) 社会言語学の視点からダグル語と中国語との接触実態を解明し、言語変異まで発生していることを明らかにした。
- (3) 異なる年齢層のダグル人の言語使用と言語意識の現状を明らかにした。
- (4) Bakker and Muysken(1994)、Bakker and Mous(1994)などが提唱する混合言語（Mixed Language）の理論がダグル語に適応することを検証できた。
- (5) 周辺メタコミュニケーション情報を多く収集することができ、ダグル人はダグル語と

ダグル文化の継承に積極的に取り組んでいることがわかった。

(6) 言語接触に関する理論的枠組の構築に中国における少数言語の事例を提供できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 11 件)

(1) 包聯群、「言語接触の視点からみるチチハル市梅リスダグル語の特徴—物語「結婚と生活の礼節」を事例として—」、『現代中国における言語政策と言語継承』(第4巻)、包聯群編著、95-110頁、三元社。査読無、2019年3月。

(2) 包聯群、「言語使用と言語意識—中国黒龍江省チチハル市ダグル人を事例として—」、『現代中国における言語政策と言語継承』(第4巻)、包聯群編著、111-127頁、三元社。査読無、2019年3月。

(3) 包聯群、「満洲語の保存と継承の動向—三家子村を事例として—」、『現代中国における言語政策と言語継承』(第4巻)、包聯群編著、149-154頁、三元社。査読無、2019年3月。

(4) 陳玉芝、包聯群、「黒龍江省民族博物館—地域社会への密着活動の記録から—」、『TOAFAEC 東アジア社会教育研究』No22、査読有。203-208頁、東京・沖縄・東アジア社会教育研究会発行。2017年。

(5) 包聯群、「1960年代の満洲語口語にみられる中国語の影響—『満語口語研究』を中心に—」、『中日言語研究論叢』(楊凱榮教授還暦記念論文集刊行会)。457-471頁、査読有。朝日出版社。2017年。

(6) HUANG Xing, BAO Lianqun、「Identification and Practical Situation of Endangered Languages in China」、『言語復興の未来と価値 理論的考察と事例研究』Minority Language Revitalization : Contemporary Approaches、桂木陸夫+ジョン・C・マーハ 編著。269-285頁。三元社。査読有、2016年12月。

(7) 包聯群、「黒龍江省チチハル市泰来県におけるモンゴル人の言語教育、言語使用、言語意識及びその言語実態」、『現代中国における言語政策と言語継承』(第3巻)、包聯群編著、145-223頁。三元社。査読無、2016年10月。

(8) 包聯群、「多様性に満ちた共生社会の構築を目指して—危機言語満洲語の保護と復興—」(To construct a full diversity of Coexistence Social-Protection and Reconstruction of the Endanger Language Manchu)、「第三回アジア未来会議」にて(CD収録A4 8枚) 査読有。渥美国際交流財団関口グローバル研究会発行。2016年9月。

(9) 井上史雄(中国語訳：包聯群)、「言語景観と言語経済」、『中国語言戦略』(No1)(徐大明主編)、6-18頁、査読有、南京大学出版社。2018年。

(10) 呉人徳司、「ダグル語のチチハル方言に関する現地調査の報告」、『現代中国における言語政策と言語継承』(第4巻)、包聯群編著(翻訳)、三元社、149-154頁。査読有、2019年。

(11) 呉人徳司、「ダグル民族における満洲の影響及び言語使用の実態」、『現代中国における言語政策と言語継承』(第2巻)、包聯群編著(翻訳)、三元社、119-125頁。査読有、2015年。

〔学会発表〕(計 12 件)

(1) 包聯群、「中国東北地域における少数言語の保護と継承の実態—満洲語・ダグル語を事例として—」、The 16th Annual Conference of the International Association of Urban Language Studies (ULS16) & The 7th Japan-China International Workshop: Language Policy and Language Inheritance in Modern China & 第七回 日中国際ワークショップ 「現代中国における言語政策と言語継承 少数言語について考える」 科研費主催(研究代表者 包聯群)、Horuto Hall OITA、2018年9月11日-12日。

(2)包聯群、The Fourth Asia Future Conference (AFC 4 第四回アジア未来会議)にて「危機とは何か(絶滅危機の言語 Endangered languages)」というセッションを組織。韓国仁川・The-K Hotel Seoul /H304-HaegunB, 2018年8月24日-28日。(渥美国際交流奨学財団) 関口グローバル研究会 (SGRA) 主催、日本文部省/韓国社会協議会など支援。

(3)包聯群、「言語景観—日本・九州観光地を事例として—」、第十一回中国社会言語学国際シンポジウム、中国・吉林大学公共外国語教育学院 (長春市)、2018年7月12-16日。

(4)包聯群、「満洲語教育と言語文化継承の実態—中国吉林省伊通満族自治州を事例として—」、平成30年度 海外学術調査フォーラムにて、東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所、2018年6月16日(土)。

(5)包聯群、「中国におけるダグル人及び梅リスダグル語の実態」、第六回 日中国際ワークショップ 「現代中国における言語政策と言語継承 少数言語 (ダグルを中心) について考える」。科研費主催 (研究代表者 包聯群)、多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3) 共催 (東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所)。東京外国語大学本郷サテライトにて、2017年11月25日。

(6)包聯群、「言語使用と言語意識—中国チチハル市梅リスダグル人を事例として」、第十五回都市言語調査国際シンポジウム並びに第二回「動態普通話」国際シンポジウム (The Joint Meeting of the 15th Urban Language Seminar (ULS15) and the 2nd Symposium on the Dynamics of Putonghua (SDP2)、マカオ大学にて、2017年10月17日。

(7)包聯群、「『三合語録』の満・蒙・漢の対訳について考える」、第二回清代言語接触研究会、科研費助成事業・若手研究(B)「17世紀から19世紀における東アジア言語政策の研究」(研究代表者 荒木典子)主催。首都大学東京南大沢キャンパスにて、2017年7月29日。

(8)包聯群、「中国の少数民族言語—満洲語教育・教科書の問題について」、第三回中国言語政策と言語計画に関する学術シンポジウム、中国言語学学会と言語政策・計画研究会 (上海外国語大学) 主催、中国教育部言語文字情報管理司指導、上海外国語大学虹口キャンパスにて、2017年7月8-9日。

(9)包聯群、「1960年代の満洲語口語にみられる中国語の影響 — 『満洲語口語研究』を中心に —」、「日本中国語学会：2016年度全国大会」にて発表。立命館アジア太平洋大学、2016年11月12-13日。

(10)包聯群、「言語の保存と文化継承—満洲語を事例として」、「第十回中国社会言語学国際シンポジウム」にて口頭発表。中国南昌大学、2016年11月4-8日。

(11)包聯群、「多様性に満ちた共生社会の構築を目指して—危機言語満洲語の保護と復興—」(To construct a full diversity of Coexistence Social-Protection and Reconstruction of the Endanger Language Manchu)、「第三回アジア未来会議」にて口頭発表。渥美国際交流財団関口グローバル研究会主催、文部科学省、外務省、九州経済連合会など協力。北九州市立大学にて、2016年9月29-10月2日。

(12)巴達瑪敖德斯尔、海拉など、包聯群、「臨床方言学の可能性—フフホト市の医療現場における中国語とモンゴル語の二言語使用やコミュニケーションの状況—」、「第十四回都市言語研究国際シンポジウム」にて口頭発表。中国・南京曉庄学院にて、2016年8月10-13日。

〔図書〕(計 2 件)

(1)包聯群編著 (翻訳)、『現代中国における言語政策と言語継承』(第4巻)、三元社。212頁。2019年3月。

(2)包聯群編著、『現代中国における言語政策と言語継承』(第3巻)、三元社。250頁。2016年

10月。

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：呉人 徳司

ローマ字氏名：KUREBITO Tokusu

所属研究機関名：東京外国語大学

部局名：アジア・アフリカ言語文化研究所

職名：教授

研究者番号（8桁）：40302898